

<前回>啓蒙主義と理神論

（1）啓蒙的近代とその意義

5. 近代とは：社会システム変動が現実性全般に及ぶプロセス
キリスト教の普遍性あるいは合理性に対する根本的な問題提起
社会統合の原理がキリスト教から次第に分離し、キリスト教の地位が相対的に低下する。
キリスト教会→国民国家、神学→哲学→科学
6. カント「啓蒙とは何か」（『啓蒙とは何か』岩波文庫）
7. 啓蒙主義とは？（ジャンタル・ムフ）
8. 啓蒙主義の思想的意義：政治プログラム、認識論における合理主義・普遍主義
自由と自律(autonomy) → 国家と教会という他律的権威への批判
他律的宗教批判あるいは宗教の合理化
9. 啓蒙主義の思想的特徴：
ティリッヒ『キリスト教思想史II』（別巻三）白水社。：自律、理性、自然、調和 → 市民としての人間、合理的宗教、コモンセンスの道徳、主観的感情。

（2）理神論＝啓蒙主義的宗教論（17～18世紀、イギリスからフランス・ドイツへ） 国家や教派を越えた決定的な影響力

10. エドワード・ハーバード、ジョン・ロック、ジョン・トーランド、カント
11. 理神論、キリスト教の合理化の試み → キリスト教の解体・宗教批判から無神論へ。
12. 宗教本質論として：信仰とは、信仰命題を真理として受け入れること。知的営み。
ハーバード『真理について』（1624）：理性宗教（自然に備わった生得的なもの）
最も本質的な最高存在が存在する、最高存在への崇拜、敬虔な崇拜は美德である、罪は悔い改めによって贖わなければならない、来世（因果応報的）の存在
13. スピノザ(1632-77)『神学・政治論——聖書の批判と言論の自由 上下』岩波文庫。
14. F.L.Cross and E.A.Livingstone (eds.),
The Oxford Dictionary of the Christian Church. Third Edition, Oxford University Press, 1997.

（3）教養市民層の宗教

15. 啓蒙的近代の宗教状況。
ヒュームの自然宗教（人間の自然本性に基づく合理的宗教）論の描く世界
クレアンテス：理神論者、フィロ：懐疑論者、デメア：有神論者
16. 啓蒙主義の多様性：イギリス、フランス、ドイツ。→比較思想研究
17. 近代ドイツにおける宗教の分化：世俗化の一つの形
ルター派／カトリック
教養市民の宗教／農民の世界／都市労働者の世界
18. 「教養市民とは、十八世紀末ないし十九世紀はじめ以降のドイツで「教養」の理念を核として輪郭をととのえていった一つの身分を指し、具体的には、ギムナジウムと大学で新人文主義的教育を受けた、ごく少数のエリート層を意味する。」（野田、21）
「各時期にもっとも活力に富んでいた筈の新しい宗教運動ないしは思想運動が、いずれもいちはやく国王とその周辺のひとつにぎりのエリート層の側に吸いとられ、民衆の側に既存エリートにたいする対抗文化を興隆させる抛りどころとはなりえなかった。いいかえれば、少数の支配層が次から次へと新しい宗教や思想を貪欲に摂取してその階層文化をゆたかにしたのにたいし、非エリート大衆の側は不活発で守旧的ルター派のカルチャーのなかにまどろみつづけたのだった。」（212）

イギリスのメソヂストとドイツの敬虔主義の違い。

↓

社会の安定化のために教会的宗教にも価値を見出しているが、自らの宗教性は、教養化

し個人化してゆく（フランス啓蒙との相違）。

3. 近代的知と自然主義

(1) 近代的知のモデルとしての自然主義

1. 西洋の「宗教と科学」関係論は、18世紀、大きな変動に遭遇する。現代人がイメージする科学、あるいは宗教と科学との関係理解は、この変動に規定されている。

啓蒙主義→実証主義的科学

村上陽一郎の聖俗革命

村上陽一郎の「聖俗革命」：「神—世界—人間」→「世界—人間」

2. 「近代科学」の自律化：一つの自律的な活動としての近代科学の自立。→啓蒙的知、啓蒙的な科学理念（実証科学としての自然科学）の誕生。近代的知のモデル。

小林道夫：仮説→実験による検証・修正

3. 代表例としてのラプラス・ラプラスの悪魔

「われわれは、宇宙の現在の状態はそれに先立つ状態の結果であり、それ以後の状態の原因であると考えなければならない。ある知性が、与えられた時点において、自然を動かしているすべての力と自然を構成しているすべての存在物の各々の状況を知っているとし、さらにこれらの与えられた情報を分析する能力をもっているとしたならば、この知性は、同一の方程式のもとに宇宙のなかの最も大きな物体の運動も、また最も軽い原子の運動をも包摂せしめるであろう。この知性にとって不確かなものは何一つないであろうし、その目には未来も過去と同様に現存することであろう。」（ラプラス、『確率の哲学的試論』、岩波文庫、一〇頁）

4. 注意点：科学の分野における相違あるいは時差

5. 近接的な作用因による因果律と自然

→ 機械論的自然 cf. 錬金術的自然

日常的経験とのずれ（デカルト）

↓

超自然・奇跡の排除あるいは合理化

(2) 自然主義と宗教、争点は何か

6. 科学と宗教との対立（近代的知・自律と伝統的権威・他律）とは、双方に原因がある。

7. そもそも、奇跡とは何か。

パネンベルクの奇跡論

759.1/

the concept of miracle has become one of the more intricate problems, because miracles are said to involve a violation of the laws of nature, as David Hume asserted in the section on miracles in his *Enquiry Concerning Human Understanding* (1748).

The concept of miracle as a violation of natural law subverts the very concept of law and in effect exposes the futility of the assertion of miracles.

760.1/

This was not the meaning of the concept of miracle in Christian theology, however. In the biblical writings, the word *miracle* refers to extraordinary events that function as "signs" of God's sovereign power. "signs and wonders"(Daniel 6:27; John 4:48)

Augustine said, "Whatever is unusual, is a miracle"(*quae sunt rara, ipsa sunt mira; De civ. Dei* 21,8,3). Explicitly he emphasized that events of that type do not occur contrary to the nature of things. To us they may appear contrary, because of our limited knowledge of the "course of nature." But God's point of view is different,.....

760.2/

In medieval theology the conception of miracles changed, because the nature of things was now

conceived of objectively, not in relation to the limitations of our knowledge. Thomas Aquinas described a miraculous action of God as occurring *praeter naturam*, different from what would be expected from the nature of things, though not *contra naturam*, contrary to their nature. The description of a miracle as *contra naturam* applies, when an experiential concept of nature is used...

760.3/

Later, the view of miracles as occurring *contra naturam* became more generally accepted, This development finally led to the idea that a miracle is a violation of the laws of nature. the concept of laws that govern the course of events, laws that are unchangeable in principle. That the order of nature, once created, is unchangeable had been affirmed already by René Descartes as a consequence of God's immutability, and Baruch Spinoza concluded that miracles therefore cannot occur. The idea of miracle, then, is excluded by definition, as we have it in Hume.

760.4/761.1

Considering this development, theology should avoid purely objective concepts of miracles as occurring *praeter naturam* or *contra naturam* and return to Augustine's idea of miracle as related to the subjectivity of our human experience of nature, especially to the limitations of our knowledge. The Augustinian concept of miracle

A miracle is just an unusual event or action, and religious interpretation identifies it as an act of God. It is this point that faith enters the picture. To those who believe in God the Creator, the world is full of miracles. Friedrich Schleiermacher said (in his second speech on religion, 1799) that miracle is the religious name for event.

761.2/762.1

Miracles in this sense are not opposed to the order of nature or to the concept of natural law. Rather, the order of nature itself by natural law is one of the greatest miracle, in view of the basic contingency of events and of their sequence. The applicability of a formula of law presupposes that something is contingently given and that some sequence of events occurs. Thus, the contingency of events is required in all the regularities described by formulas of natural law. Even if some events or phenomena may not be explainable by the laws of nature known at a given time, they may be explainable in the future, when a more comprehensive understanding of natural processes emerges. Even the resurrection of Jesus, the central miracle of the Christian faith, need not defy such explanation in principle, although at present it certainly does.

762.2/

The concept of miracle in the Augustinian sense of the term, then, does not involve any opposition to the order of nature described in terms of natural law. It only requires us to admit that we do not know everything about how the processes of nature work. In any event, the awareness of the limitations of our knowledge may keep us from denying on principle the possibility of natural events, even if they are extremely unusual. that (to deny their possibility on principle) would be a form of dogmatism and not consonant with the empirical attitude of science.

8. John Locke: according to the reason / above / contrary to knowledge / faith 信仰と知との関係、信仰にとっての懐疑の意味 (Paul Tillich, *Dynamics of Faith*) 懐疑は信仰の構成要素である。

9. ヒック：自然主義とは何か。→近代の様々な世界観が共有する立場。

自然主義と宗教は論理的には相互に論駁不可能な二つの世界の見方。

→ 宗教的見方にもそれ固有の合理性が認められる。合理性の複数性。

「まずは自然主義の世界観を頭に入れておく必要がある。これは近代の西欧思想の中心にあるもので、仮想の实在というものの可能性を一切認めない考えである。自然主義の世界

観は有力な科学者から提出された山のような注釈によって、いまや疑う余地のない仮説と見なされている。」(3)

「根本的な信仰箇条」「科学内部の、つまりは一般社会内部での優勢な無批判的仮説ないしは根底的なパラダイム」(4)

「心と脳の問題に関していえば、ハードな、つまり唯物論的な自然主義と、ソフトな自然主義とがある。ハードな自然主義のほうは宇宙の「すべてが」という意味で、宇宙は物質によってのみ構成されているとする。またソフトな自然主義の方は、非物質的な意識の存在を容認するものの、それが脳を構成する物質には何の影響も与えないとする。」(4-5)

「脳のその活動が不断に続く自然界の因果的連鎖の一部となっているということまでも必然的にとまなう。」(7)

10. グリフィン：広義あるいは狭義の、弱いあるいは強い自然主義の区別。

広義の弱い自然主義への注目→対立を越えて（決定論対自由・意識など）

・強い自然主義

ミクロ・レベルの進化（遺伝子レベルのあるいは表現型の変化）、マクロ・レベルの進化（先行する種から現存のすべての生命の種が発生するというマクロ進化。生命の系統分類学の対象）、自然主義（マクロ・レベルでの進化の説明のために、通常の因果的プロセスに対する奇跡的超自然的な干渉を導入することを認めないという最低限度の意味での）、斉一主義（超自然的な神の干渉を排除し因果的な要因のみを用いるという存在論的な斉一主義）、方法論的認識論（超自然的な干渉だけでなく、有限の存在や出来事を越えた目的をもった力による一切の干渉を排除する）、実証主義（進化のすべての原因は観察によって原理的に検証可能である）、決定論（世界は例外なしに原因と結果の決定論的な体系であること）、マクロ進化のミクロ進化への還元、すべての生命の出現がランダムな変異に対する自然選択の作用のみから説明されること（進化の統合説）、漸進主義（マクロ・レベルの進化は小さなステップを経て一步一步信仰するプロセスである）、唯名論（プラトニズム的な実在の拒否。形相や種は名前に過ぎない）、完全な無神論、無意味性・非道徳性、非進歩主義。

自然主義の多様性と宗教との協調可能性。最初の4つの要素のみを含む弱い・広義の自然主義と、それ以外の諸要素をも含む強い・狭義の自然主義。

cf. 方法論的無神論と形而上学的無神論との区別

<参考文献>

1. 芦名定道編『科学時代を生きる宗教 過去と現在、そして未来へ』北樹出版、2004年。
芦名定道「キリスト教と進化論」、金城学院大学キリスト教文化研究所編『宗教・科学・いのち 新しい対話の道を求めて』新教出版社、2006年、102-123頁。
芦名定道『自然神学再考』晃洋書房、2007年。
2. 小林道夫『科学哲学』産業図書。
3. 村上陽一郎『近代科学と聖俗革命』新曜社、『科学・哲学・信仰』第三文明社。
4. ブライアン・イーズリー『魔女狩り 対 新哲学』平凡社。
5. ヒック『人はいかにして神と出会うか 宗教多元主義から脳科学への応答』法蔵館。
6. グリフィン(David Ray Griffin)
Religion and Scientific Naturalism. Overcoming the Conflicts, State University of New York Press, 2000.
Two Great Truths. A New Synthesis of Scientific Naturalism and Christian Faith, Westminster John Knox Press, 2004.
7. パネンベルク (Wolfhart Pannenberg)
"The Concept of Miracle," in: *Zygon*, vol.37.no.3 (September 2002) by the Joint Publication Board of Zygon, pp.759-762.
8. ヒューム『『奇蹟論・迷信論・自殺論 —ヒューム宗教論集 3』法政大学出版局。